

東京交響楽団
楽団員が語る
名曲のツボ
Vol.57



©N. Ikegami

首席ティンパニ奏者

清水 太

Futoshi Shimizu



指揮者の数だけ多様な「第九」があります。「昨年のノット監督の第九は衝撃的。しかも決して奇をてらわず正統的な音楽づくりで。第九初演時はこんな衝撃だったのではと思いました。桂冠指揮者秋山氏の第九は、東響との関係の奥深さを感じさせます。「秋山節」をゆるぎなく求め、それが素晴らしい第九をもたらすのです」。

Symphony No.9 “Choral” Ludwig van Beethoven

ベートーヴェン 作曲 交響曲第9番「合唱付」

ティンパニにとって最重要作品！
“革新”の集大成の音楽で1年を振り返る

ティンパニストにとって「第九」はクラシック音楽の中で最も重要な作品で、世界中のオーケストラの入団オーディションでも第1、2、4楽章が課題曲となる、必須の作品です。

例えば第1楽章のコダ。交響曲の形式を変えたともいわれる革新的な部分で、ブルックナーが第1楽章と第4楽章に必ずコダを書いたのは、「第九」のこの部分に憧れていたからと言われています。ここはオーケストラに入る前、若い頃から練習しており、ティンパニストの人生観が投影される部分でもあります。ここを毎年年末に演奏するたび1年を回想し、更新していく、そんな感覚になるのです。

「第九」といえば第4楽章が象徴的ですが、楽章の始まりのきつかけとなるのがティンパニの強音です。アンサンブルが難しいため、ティンパニが音量を落としている録音や演奏を聴くこともあります。ここは「ついに第4楽章だ！」と期待が高まるどころ。そこでバランスを取るためにごちんまりした演奏になつていはずがありません。「歓喜に寄す」の「歓喜」は「きれいな美しい」ではなく「衝撃」だと僕は思うのです。バリトンが第3楽章

までを「こんな音楽はよそう！」と否定しますが、その衝撃を表現したのが第4楽章冒頭のティンパニだと考えて演奏しています。

ベートーヴェンはティンパニがお気に入りだったようで、さまざまな挑戦的なことをしています。たとえばティンパニの音程は完全4度か完全5度が常識的とされていましたが、オペラ「フィデリオ」で三全音（増4度）を使い、交響曲第7番で6度、第8番でオクターヴを使うという革新的なことをしました。その集大成が「第九」で、これまで用いた音程をすべて使い、さらに第3楽章最後で初めて重音（2つの音を同時に叩く）を鳴らします。9番目の交響曲でも新しい響きに挑む、その姿勢に圧倒されます。

「第九」で僕が好きな部分は2つあります。まずは、第4楽章の二重フーガで合唱が「全世界に（ganzen Welt）」と歌うとき一緒にティンパニが「レレレ」と叩くところ。世界がひとつになるという理想を掲げた、「第九」の中でドイツの精神性を最も表す部分だと感じ、自分の中で意味深く演奏しています。また、バリトンのソロの歌詞で「Feuertunken」の「Feuer」（火）をきれいに歌うのではなく、アクセ

ントをつける歌い方が好きです。歌詞には「歓喜」「神々の火花」「火」と順に登場するので、「火」にアクセントがあるとメッセージ性を強く感じるので。

ティンパニの一番の聴きどころは、やはり第2楽章でしょう。アグレッシブな音が求められるので、古楽が定着した現在では木のバチで叩くこともあります。その一方、指揮者によってはやはり現代ティンパニのサウンドが望まれたり、バチの選択は奏者に任されているので、そこに音楽性の違いも表れます。また第3楽章は柔らかい音楽ですから、「第九」は柔らかいバチから硬いバチまで必要な曲。僕は「第九」1曲の中で少なくとも5組、多いときは10組ほどのバチを使います。ティンパニが独りよがりでは音楽が成立せず、かといって引っ込んでいてはダメで主張し続けられない。「第九」は何度やってもプレッシャーが半端なく、演奏中はベートーヴェン像が目の前にいて睨まれている感覚になります（苦笑）。だからこそ、毎年年末に演奏するたび自分のいろいろな面が見えてきます。ベートーヴェン・イヤールの今年は何んな「第九」が見えるか楽しみです。